令和５年度

「いわての復興教育」実践事例集

令和６年３月

岩手県教育委員会

「いわての復興教育推進事業（震災学習列車活用スクール）」実践事例

学校名：岩手県立山田高等学校

Ⅰ　事業の概要（地域の実情含む）

山田町は、三陸海岸のほぼ中央に位置し、豊かな自然に恵まれた地である。海岸線は、典型的なリアス海岸で、牡蠣やホタテの養殖が盛んであり、水産業は町の基幹産業となっている。

一方、リアス海岸の特性上、津波発生時には波のエネルギーが集中し、遡上高は凄まじいものとなる。近代になってこの地域は、明治三陸大津波、昭和三陸大津波、チリ地震津波と三度にわたり巨大津波に襲われ、甚大な被害を出している。特にも明治三陸大津波は、2,950 名もの死者を出し、当時の住民の３割が津波の犠牲となった。

そして 2011 年の東日本大震災では、巨大津波と、それに伴う津波火災で、町の中心部が火災に見舞われ、実に町内の 38.4％（データは山田町より。以下同じ）もの家屋が全壊した。そして死者・行方不明者は 825 名と多くの尊い人命が失われた。

東日本大震災時の本校体育館

本校は、東日本大震災時、町指定の避難所として最大約 1,300 名の方々が利用した。今後再び地震や津波が町を襲った場合、本校は地域に貢献する必要がある。そのため本校では、幾度にわたる地震や津波被害の被災体験を後世に語り継ぐために、１学年の総合的な探究の時間で、復興・防災学習を行っている。今年の１学年の総合的な探究の時間では、特に昨年度、現在の２学年が山田町と協働して取り組み作成した「山田町津波碑ガイドマップ」に記載された津波碑の内容を地域住民や小学生に伝承することに重点を置き取り組んでいる。津波碑についての探究学習を通し、過去の地震や津波の被害状況や教訓を調べ、学び、地域の幅広い世代に伝承することにより、地域の防災意識の高揚につなげたいと考えている。

今回の震災学習列車では、山田高校から町の中心部にある陸中山田駅まで歩き、陸中山田駅から１学年全員が１両に乗車し、三陸鉄道のガイドの説明を聞きながら、釜石駅までの区間、沿岸部の復興状況を確認した。下車後、釜石駅から貸切バスで陸前高田市の東日本大震災津波伝承館まで移動し、震災学習を行った。館内でガイドの詳しい説明を受け学習した後、自由見学の時間を設け、生徒各々が徒歩で震災遺構や「奇跡の一本松」等を見学した。

Ⅱ　取組の概要

1　事前学習

震災学習列車に先立って、山田町津波碑ガイドマップに記載された津波碑について学習した。生徒は、東日本大震災については、幼い時期のことながらも多少記憶に残っており、小中学校の防災学習で学んではきたが、それ以前にも山田町を襲った幾多の津波についてはあまり知らない様子であった。そこで、グループを編成し、１人１台の情報端末を活用しながら津波碑に記された明治三陸大津波と昭和三陸大津波の歴史（発生メカニズム・被害状況等）を学んだ。生徒は、直近の東日本大震災の被害状況等はある程度認識していたが、特に明治三陸大津波の甚大な被害については実際に自分で調べることで、その歴史から多くの教訓を学び取ることができた。

2　フィールドワーク

本校は、山田町と包括連携協定を締結していることから、山田町教育委員会生涯学習課文化係の全面協力の下で、地元の「鯨と海の科学館」の専門指導員を務め、地域の歴史に詳しく、自身もチリ地震津波を体験した方を講師に招き、１学年に津波碑についての講義をしていただいた。さらに山田町の貸切バスを利用したフィールドワークを２度行い、講師の方の案内で実際に山田町津波碑ガイドマップに記載された津波碑を訪れ、津波碑の内容や意義について詳しく説明をしていただいた。生徒は、過去の

地震や津波の歴史を肌で感じることができ、歴史を語り継ぐことの大切さを再確認した。

3　震災学習列車

三陸鉄道の陸中山田駅から震災学習列車に乗車し、三陸鉄道職員である担当者の詳しい解説を受けながら釜石駅までの区間、沿岸市町村の被災状況及び現状を学び、確認できた。また、陸前高田市の東日本大震災津波伝承館において、ガイドの詳しい説明を受けながら、地震や津波のしくみ、被災状況まで幅広く学ぶことができた。

4　その後の取り組み

９月末には山田町と共催で、山田町の貸切バス２台で津波碑ガイドツアーを行った。１学年の生徒が津波碑の前でガイドツアーに参加した地元の方々に津波碑の内容について丁寧に説明を行った。２月には１学年が地元の山田小学校に出向き、５年生を対象に防災出前授業を実施した。震災学習の成果を次世代に伝えられるように、模擬授業を行いながら準備を行った。

Ⅲ　取組の成果と課題

1　成果

（1）震災学習列車

生徒は三陸鉄道の震災学習列車に乗車し、出発点の陸中山田駅や織笠駅、船越駅周辺から釜石駅までの被災状況や復興の様子について、ガイドから詳しい説明を受けながら学習を深めることができた。

ガイドを務めてくれた三陸鉄道の職員は 20 代の若い女性で、自らも被災したことから、地域復興の担い手として少しでも役に立ちたいとの思いで三陸鉄道に入社したということであった。

生徒への問いかけを交えた説明は非常にわかりやすく、復興に対する熱い思いもひしひしと伝わってきた。説明の中で、三陸鉄道が被災で苦しむ住民の足として震災後僅か５日で一部区間の運行を再開したことや、鵜住居駅での説明で「釜石の奇跡」といわれた釜石東中学校の話をしていただいた。災害直後に人々の交通手段の確保が必要なことや、津波の際に迅速な避難行動がどれだけ重要であるかということを教えていただいた。

また、ガイドの方の「震災の被害だけでなく、ここまで復興したんだという沿岸地域の姿を震災学習列車を通して生徒たちに見てほしかった」という言葉が印象に残った。

震災学習列車での学び

（2）東日本大震災津波伝承館

陸前高田市は、先の東日本大震災で甚大な被害を受けた地域である。伝承館ではガイドの方から巨大津波の猛威と被害の甚大さを写真や資料、焼け焦げた震災遺物を通してわかりやすく説明してもらった。また、当時の生々しい映像から震災の悲惨さに衝撃を受けたように見受けられる生徒もいたが、生徒は真剣に震災の実態に向き合っているようであった。

東日本大震災津波伝承館

2　課題

あの東日本大震災から 13 年が経つ。震災の記憶が薄れていく中で、命を守る防災の観点からも、過去の震災の歴史から多くのことを教訓として学び次世代に伝えていくためにも、一過性的な経験や活動で終わらせることなく、生きた知識、血肉となるよう震災学習を深化させる必要性がある。今後は生徒一人ひとりの特性を踏まえて成長を促すような教育課程の編成や、復興教育の一層の充実に向けて、地域といかに計画的・系統的に協力・連携していくかが課題である。